



執行役員

小泉 泰之

Yasuyuki Koizumi

坂の上の新たな雲

司馬遼太郎の歴史小説『坂の上の雲』はNHKによってドラマ化されましたし、愛読されている方も多いことと思います。『坂の上の雲』とは、封建の世から目覚めたばかりの日本が、そこを登り詰めてさえ行けば、やがては手が届くと思いきや焦がれた欧米的近代国家というものを「坂の上になびく一筋の雲」に例えた切なさや憧憬をこめた題名です。

明治初年の日本はたいへん小さな国でした。産業といえば農業しかなく、人材といえば三百年の読書階級であった旧士族しかありませんでした。この小さな、世界の片田舎のような国がはじめてヨーロッパ文明と血みどろの対決をしたのが、日露戦争です。戦わなければ植民地にされてしまうという危機意識の下、当時の日本人たちは精一杯の知恵と勇気を持ち、そして幸運をすかさず掴み、外交能力の限りを尽くして戦争に勝利するまでにこぎつけました。現在のビジネス社会で日々戦っている諸氏は自分の戦いを当時の秋山兄弟の苦難に満ちた戦いに重ね合わせることができます。それがこの小説を多くのビジネスマンが支持し、愛読する理由でしょう。

日本の製造業は第二次世界大戦の敗戦から立ち直り、長期にわたって世界市場で圧倒的な強みをみせてきました。素材から応用までの商品を各種取り揃え、高い技術力を持ち、ありとあらゆる要素技術を抱えています。そのテクノロジーによって日本の製造業は素晴らしい発展を遂げました。しかし、最近の製造業はさまざまな課題を抱えています。まず、団塊世代の大量退職に伴う技術継承問題、いわゆる「匠の危機」問題です。これは製造業に限った課題ではありませんが、暗黙知を形式知に置き換えることの難しさは多くの企業にとって共通の課題です。

次の課題はグローバル競争です。1980年代の日本は北米への輸出を中心に大きく経済成長しました。これは日本の技術力が優れていたことと同じくらいに円安効果が効いていたためです。それを忘れて日本人はやや自信

過剰になっていたかもしれません。その後、プラザ合意以降の円高誘導があり、輸出に苦戦した日本企業の多くは生産拠点を海外へ移す戦略を採ってきました。ただ、グローバル競争というのは円高との戦いだけではありません。「製品のグローバルネットワーク化」の問題もあります。

最終製品を完成させるために必要な部品のすべてを自社生産する企業はまず無いと思います。最終製品が完成するまでには多くの製造会社で構成するサプライチェーン(ネットワーク)が必要です。問題は自社がこのネットワークに入っているか、あるいは知らないうちに外へ出されていないかです。国内市場だけでなく海外市場でもネットワークは構成されていきます。海外向けの製品開発ではグローバルスタンダードを意識しておかないと、いつの間にか日本内部でのみ有効な製品となってしまいます。知らないうちに海外のネットワークから外される目にあうでしょう。

匠の危機を乗り越えグローバル競争に勝つという、私たち製造業にとっての「新たな雲」は、当時の秋山兄弟が見た雲と同じくらい決して近いものではないでしょう。しかし、当時の日本人は奇跡に近い偉業を成し遂げることができました。現在の私たちが「新たな雲」に近づけないはずはありません。そのためには技術開発にチャレンジし続けることが必要です。

本誌には当社の技術開発成果を掲載しています。2010年度には、業界最高水準の低消費電力化を図った冷却ファンの開発、省エネ機能を併せ持つ瞬時電圧低下補償装置の開発、海外向け太陽光発電用パワーコンディショナの開発、高い防水性能を備えたステッピングモータの開発などの成果がありました。

これからもこうした技術開発を継続することによって「坂の上の新たな雲」に少しでも近づき、そして、明治時代の日本人から子孫たちも頑張っていると評価してもらいたいものです。
